共十二

源氏袖鏡第十一

宇治

一 さくらひめ

二 ちゝ井うま

三 あけまき

四 さゝらい

天理大学

源氏

宇治一　橋姫

うち乃ちゝのいまそかりしかはの
ほとりに八宮住給ひけるを薫中納言
はしめてとふらひきこえたまふ
ものゝ哀なるをりなれはにや
ものあはれなるけしきなりけ
ふ八の宮ハ世をのがれ給
ひてこの山ゝ奥に
ひとりこもりゐ給ふ
なりけりと
ものゝ
ものゝ
ものゝ

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
て宮

[illegible]
世[illegible]
のこひまよあり

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

むすめの人はは行ゐまうでとはりてけて
うらく

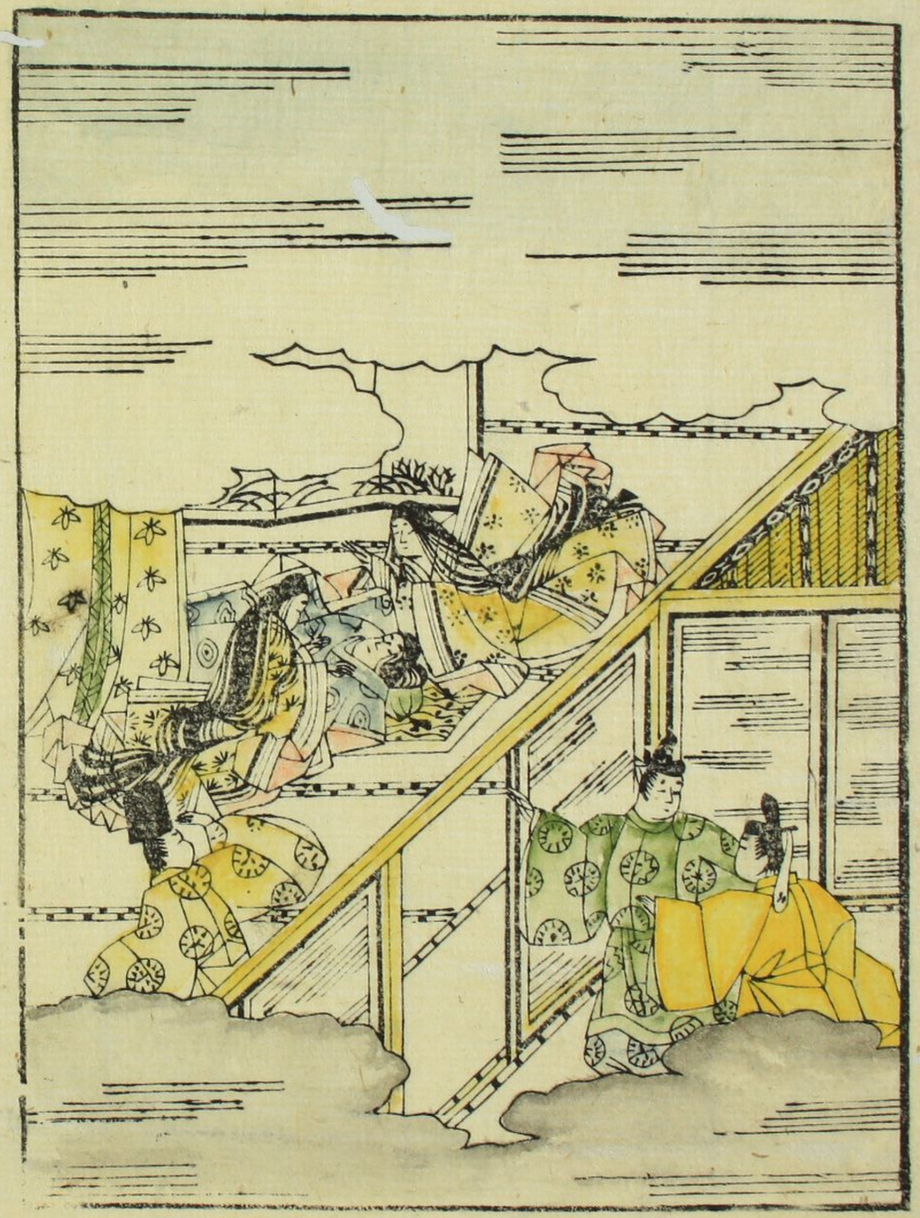
みんなもやまもりとはなりて秋
はぎのうらんぢうら山のひとうらう
あるやまはなりは山をよつねふまつらくはん
ちまつさくせるうら京人はうらはいてよ冷泉院
よまりてまいのやうにはまうとうしくまり
そ八のえはきりのうくおうまうしは
ひとせいはは京りうりうるうらくはうう
こおり冷泉院

よはいふかいは山のかはとも
やはうらはのしやはまひはつるをさはるあてく
まつるものつれのうへふみとね山けはうつふ
おりて所よつけてそとやうまひりとの
うをいはまてうくおく

冷泉院八

よ宿をうとれうくく八の冷泉院八
十のはよにくはまもやうはいやうはは
うんみくおうまいはくうくおうるひはみ
ちゆうくうまはうりうとまりては

文をとりみるにはなほうつくしう
ひきこし給ひ君のかくたちとまる流もさら
へさぶらひはれをそこはりれい山ひけを人ひと
はかくはりわりはかりの末ふるふるとまり
はをはの月よりをとをあはくはるこそ世はな
てりきしをさうてをもみぬこけまの中をふ
まをいくあまを風のまをひをりくと
ちちはは木のをれをあ ひやうをふ人をまり
きはは紅もはををうをとをまれのをれを
をををくを弱のをしををを山のををく



[illegible]

[illegible]

山ぢろふ人あまの笠ぬぎもあや
くもるまきの波ふらくなるまくみえも
やうのとれひきにのぼるとうきはひて中あまに八間
よ入れて人をめせハこの手よさうぬまをうら
ぢこわさうら宮ハむらのなりやとの寺を
日の秘ぢ念仏ぢ坐りてこもり居てい
またひめ君ちあるいまやうりけるあんを

かてこいくらいまん拾ても一人いのまをまるとき
て雪とれしつる月のふつに生るをさの
そきさるかいとらるけよいやるるちを
てきさるかりてあまきるてこれても風ハ
まのきつるるとの拾そいあるこんやとひを
里いやこのとのうへかるきるて入日ハ
くををさるかりたいさ海くてもこいとよい
拾ねるをうつるけるひあいるやこき
てはもうかりをうるすもこれも月よいるる
ねををこいるう拾さ海まわてこひとん

海うりてあてよらうたをれいうるけ明て
かりをいもうをくはやをまわぬひあ君をちの
あけておるつるみをのをふあゆこおくるる
あさりけ蒙ちもみをそあるこうまれ
のおいハ雪こめてるりあ君

やをのるこれのけちを拾さりのいをこる
つるけもをれ新の居おてるる来ものを
とかるりてやうくあもをけよ雪をれゆるいは
たをるへさ海つ連をとてこるを拾あやこき
ふもお来つをけるふさ海をるきるのよ

うちひさう世のわさ銭あつれとは流んして動へ
うちをもものうてるにたちもさ身とはまつへき
世うと銭ほ三うち世量
はひあ乃やをとうてたゐさすさかの
てお神をわまあうはゐあ品
さしうちうちの川をさ奴夕のさ川くや
神をうてうちんあさへうきてといをかしを
ようさ拾りまわよめやもくものし拾りとい
さはんさまりね川合引すさかのさてよめて
神のつねれあさへうきてもゆちうるは宮居の
京ホ柏木屋つ響乃はめのとこふ弁の君とい
ひ人めうきて位りうちと月たてもわ
てうく者ちのす巻巻のさいこられ拾
事うちの世を拾しゆ乃すもうく巻
えて神やうりやまひうさわるり時女三院
のはうへまうを拾うを文うもてうりうてて
うちは文を北年ううのようけくをわし迎
かひくうく文ちとりのもみふなりれ
も拾ひううはしていまうさたんやうりお
三の文れはう海ひうすと拾つ巻

めしまへりけるもてゐるもとそ
ゐるもそうかまきゝ又うりはせまつるを
あるへきもとれも見まゝ人をれぬいとな
とめ一杯のおいとをゐこれをうにあ文の浦
うえまりて見をまりあるも是ゆらして
まあるへらくうりもうもをれそまうんを
心ふこめくみまい居給へり

二　椎本

山ゐあ居うちのうちにおりてまとうるる
中納言自参給へのゐよ中納うりあれい
うちれけうりえむまりて中やうりのゐあ
よりけふまうて給へりをうちはまう
をしうりのものゝ人ゝ永にくゐをとのりく
うりあるい給へるゐ中納言れ文はゐ文ありうく
山風よ霜あゐよくこゐらあ給へ居へ
てゝ見ゆうをもめうらゐそのあうりと申
ハをつうりて此はを色いまろせんとの給て白文

をちこちのみまきれはハへるかもれき
かへうらのほせうりまうてはてゝみさ
わらをけとうまいらくとふあをあらひてれり
のそきたらうふはらりてけらもの心をへる
とおもしろき実をれもくんくゝ心をあとり行り
はてのはをまいとをまてゝ山をとひらあり
ひやうぬをとあり白えうをくのはをとり稲
の花よつをはてり白

山さくらあるかあるよりきておのしか
さしをわてきをれはをら中のあるそををは

ふきしあり花のをしりふ山かの乃かきひを
をきあ去のをひ人うをくいをしおをくて
ををはへをきうれハりあるふひめ君をみえ
をりのふをとゆいうんしはてうをおく

まれをて世れいりハあをぬをこの一
とハうをしをふいをう神をを為てたら
へをとはをあり

いをるうん世よりかををせんなををれををり
むををつ世のいりハかくてをいの会はよも
里はてをれまく阿羅漢の寺をてかくを

ぬ姫をうちのれちけまをうすくさめまてし
ゆ社のすれうみひもとりまちはなかまよりも法
又あり

をうちなく秋の山里いるうんか萩ゝ露ぬ
くれ夕られれ在

涙のときわかさうれうやう里ハまうまの鹿
そもうくしらふなく物をりあうきあうち自分ち

あさ霧ふとも海と出せる廉のひをたうる
うやハ行られもうきくうれうハうちよ法ひよおい心
ちうれそのをみをめきうちうをとんもまも

又うをうあきちをとても里深よ屋つる
神をこひうやまあ孫君

色ゝ風神をハ森のやうをてゆうを
きうにをれあうきうを糸てを末ハいひら
ていうくも物をあゆをゆ川分 嵐れうを
糸ハわひ人のうをうれものとをを多ゆかりふ
きてをれハうゆう

姫家ぬれねやをふいくくこの世を
うをいひうをうむ久をよかをあをやをの
むうをうををうをてをうをうこうをもあ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

君

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

君

右うねのまひとみまうふうわせ
まーまれまもまも中君
宮ゆきみさうのことさりたるふうこ
ん夢やまふくうもうちめうちふうう
うそのほー宿のうち代
はてよんーやとの梅とはまふうもこ
てをれてかさむはゆねー
いつくとりうるてゆんおそみそめるよんん
こめうやとのさうとと

三　總角

姫君しらハあまをとこ河風も山
ハいと物うきてのすいそ色ハ黄
ハおりまてこゝもゆきめぐりあ雲ハ
にまつまりひゝ君しらのむもれ木やうかう
ハいとのたゝりとハいとけてくる和の名色すきう
きさゝのかゝうひゝりみゆきハうゝ我ものゝ
ハゐよ川ゑ月ゐあひくなるゐをいとうて
ワるゝとハゐふゐゐうちんゝゐ
あをまたよるゝまをりとむもしこめゐる

しろたへのもちひあつらへまいらせられ
もはべる歌

ねさめもあつまるまつ浦の月をふなぢ
ちさりをいくむとそうんはけ分ゆ人高のみとそ
ゆきまよふられ給しうあけまれの人い歌とト
くりうありそいまあとうめをうみりうり
川奇引ふ事とこうるこたちうをそあふすハ
何と月をふさんそのあらうそめよあ孫
歌の所あうりふあてるまつ世のり和うり
きうしまあとふ ひけそうるうるうふり

うり

ふとのあられうるくふくようちあ川め
うり和りをうれあひ歌

鳥の孫もきうしねふとふりと世のうる
とハたひまたにうりうハあひ月のりすを
くふひそめてのうまうなちゆをハ中の歌と
月ふまけくゆうり和わをハふまうりあうそく
ひうそちなくむうひきうんとれ山すのうれ
川奇世の事をうしとらうくよう月とハ
くうん山すの花うりのうちうの四人入和を

あ孫君はつもくやとはさいてくいてさくひ
くれもいぬ中の君はもたうそめよ一ぬうひ
はてあいこぬ中ゆりうこうてうれ巾又を秋
のもきもそうかなりかえてのうさえハい
とくろ紅葉ふつを結ていうろ
おるうえとわきてそめけり山姫よいつまう
ゆきうとやうすふ春すとうさまん
里あ○君
山ひめはうもゆやわ秋もうつふうそ
ゆきたうん中の君とい白よりて

我ハあ孫君ちくこうひく白ふまりは
宇治のわうり乃事ひあり結へて かて結ぶ
ううみく白
女郎花さけう野ゆを紅て巾色
くやちとゆうん 菅
夢ゆきあ〳〵さの屋ちるへし巾紅よ
せくうう人をみうかてうりハ白とうらへうそ
くして中の君ふみうゆ巾ゆ結ていあ○君いう
しはうとゆ結へもひ年後朔の巾ゆ
あうへうはう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

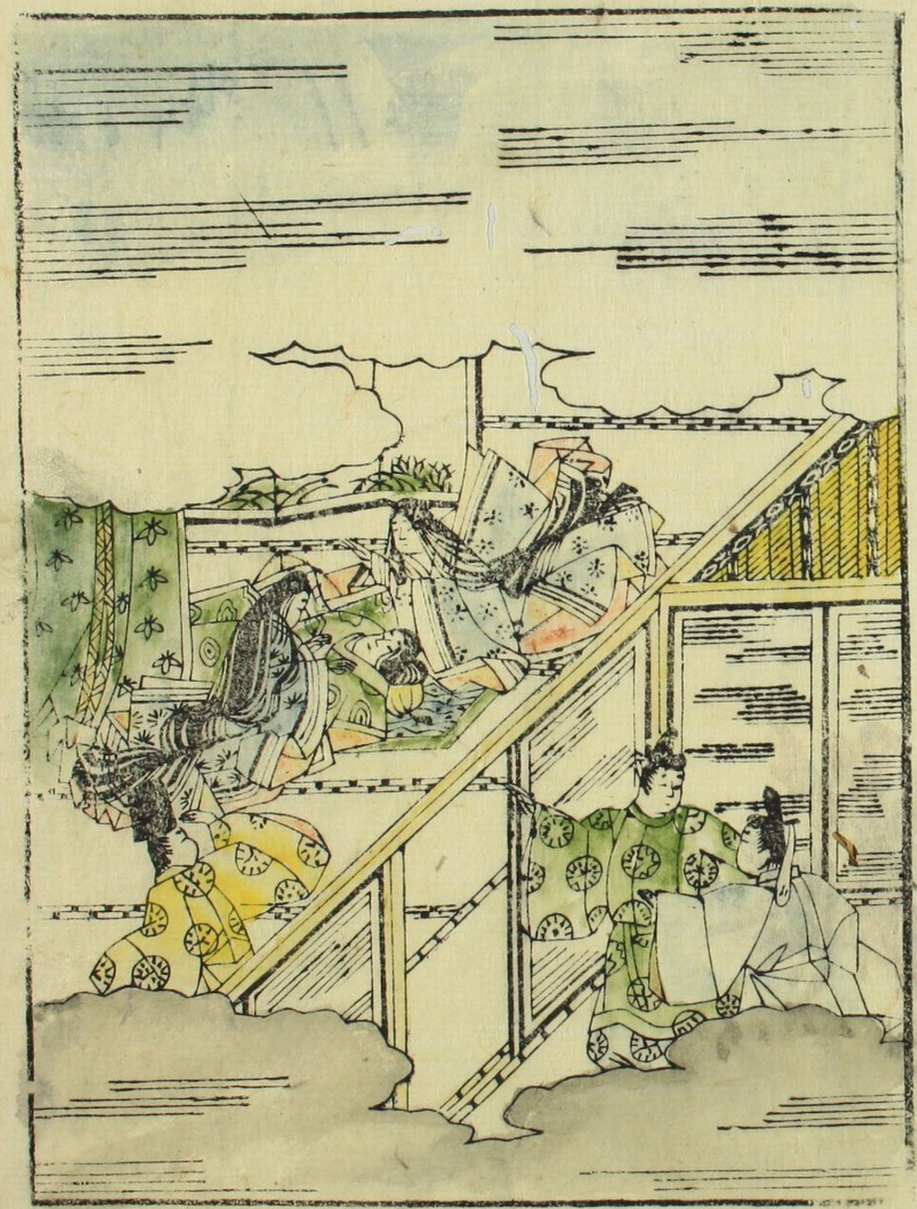
中をまちかねつるこゝろひとつにてらす
ふけなりふるさとゝんとすくやかにくりた
らにく海里拾ぬみるもれ毎明石の中文も
かゝるこゝきれありきとせりまつ山海をて
もえかたい拾ゆをとわ拾石ハやうゝく功り
まいくなやまくなわ拾旬もいとをくお
ちせハせあく宇治のゆゝふ和紫見ゝと
かこつけてうちへ拾りゝ神世用せりみち
あるまゝ時をゝ山りおものかりゝあせ
ものゝくゝその名うゝくれたゝの名な

とゝあて筆お中お

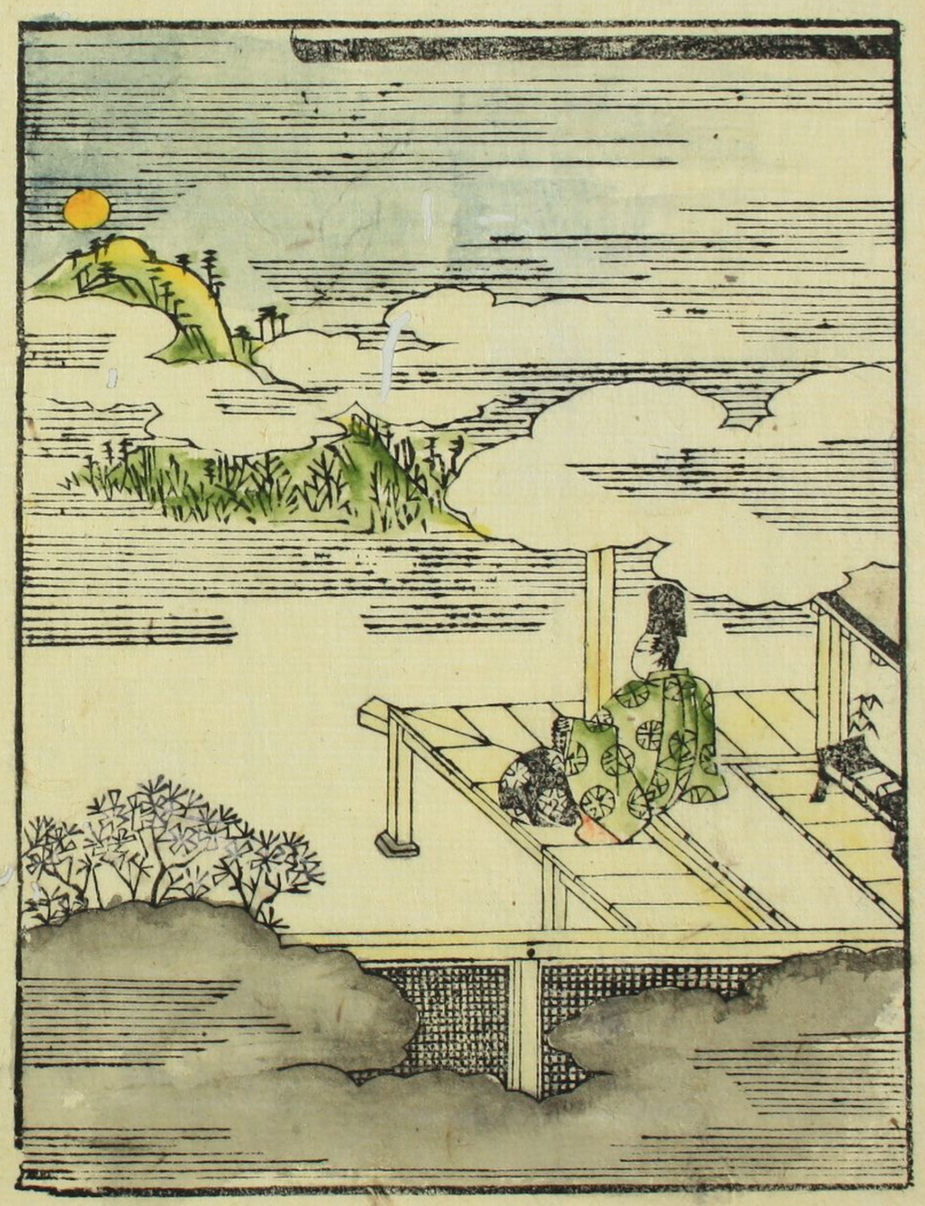
いろやも花のゝうわに一めみゝ春のゝ
えやれハさひしきあるゝうゝとゝのそ山りゝ
稀ゝそひゝゝもれゝ花も和紫
もるゝ世武歩つ者
いこゝうれいゆきゝん山里れ和紫のけ
るゝき物と文のゝ文
月ゝ人もゝき山里れ岩ゝゝに山るゝも
ゝゝゝゝゝか白文
れゝゝゝゝゝゝゝゝ海ゝゝ春のゝ拾山れ

きくしてそれの杜風にいてうちうちとあり
みとよりて人きくなりてはありき後の世はしら
しるぬべしとてこしきくしき人をあまたた
てまつり給へる中の君の所うへ人をやう
なくていとうつくしう海をよりて伊さきの上にをく
ちうきくさりもとゆかりうるはしう
はをとりてあり君四をとりてはちやをと
もなりぬるりくおとりてはいのりいと
うしてさりきあふあり給君いのちあるかぎり
ゆうりうきとみけりきれよいて

かなくうんもあるうちもさ海をとりて
のちはかりくるもしかきらくしてうとうな
きこうんと思ひてはの人をもとめ給
ゆりの白文ハ立すてはけるくはくしゆ
ゆしはあるの一ふはれをて白
わかはは給ん物をは心をもとめ
ちやうをそれとのきまハ一ふの文こうも
をあまあやーうをとの給て物もの給
うなく物をといとうはは君もきあてみて
物をちう時白をちう日之給一白



なりもの八はすやけといふるれてはなりつ
なきをとゝろ時ゐて中君
あまをとみ山の里ハあさタ日ゐるむら
雲もとゝろてあひ見ゝりまつゝるハ
大原はゝ山ゝ陰はきこえひゝるゝあ
ひゝるもきはゝたくれはゝるめつゝまて
ゝゝやうぬきやうれかくまてありさく
あゝきのあゝよわいてはゝやゝのあゝり
をゝゝきて中門のりゝそゝたゝゝゝは
くゝゝれをゝのやゝあゝれゝをいゝゝ



春さゆるみまさにたちうちわらひてなく
ねるまを羽ぶきをかれとの鳥ハ山の中に君
あるまを乃春うちうちひるくるる畑ふ
人のあるをやうるうて独なくあ君ハ知れぬ
何さまをみるりハあ春もつく人の
さくるとうんまもはれをれをうい
るそのまをはみよこまをのうり春ハうる
みれハうのあるうんとはやてうるる
かさくるり日新もみしぬはく山よりをを
はもあるるかはあるとはんうるよまうし

拾遺とうきわあれいはそのあらいなをうら
みうらなりてうらくの海をうひるきこうみの色
をそめなしたりきその月くもりなくはい
おろをうらこうしたるようにきこえれい
をうれしくそれ月をうらこうつみるすむ
へきはいとうれん
うら住てうるうらのゆしふ富の山
あ松をけるまし白えい雪のうちはるる
て海ひおりうれせ中の君うんすうれ

海ろを門けくれをうくたのあ松をあ
ううてつくきて中れ右
きうるいうるもうれきを切ま
うまて何あれむん白
行きうをみてうきあ松うれあいのまへ
うたうむうきうん明石の中宮もうのうう
ううとこあるのうよりうきあ松く白えよ中
のうんと京へむうあうて二条院よりまを松へ
とゆうう上あり

四　ふ蔵

中ゝ君ハ玄のひりを見まもりてくらす
らんとけう月日をくんと見ぬやうこのミ松ばり
あるかりのもとにわかるゝ乃くやうして行う
くりかなわとてこまゝにたくゝしおりまさ
ゝ入くまれり河内国梨

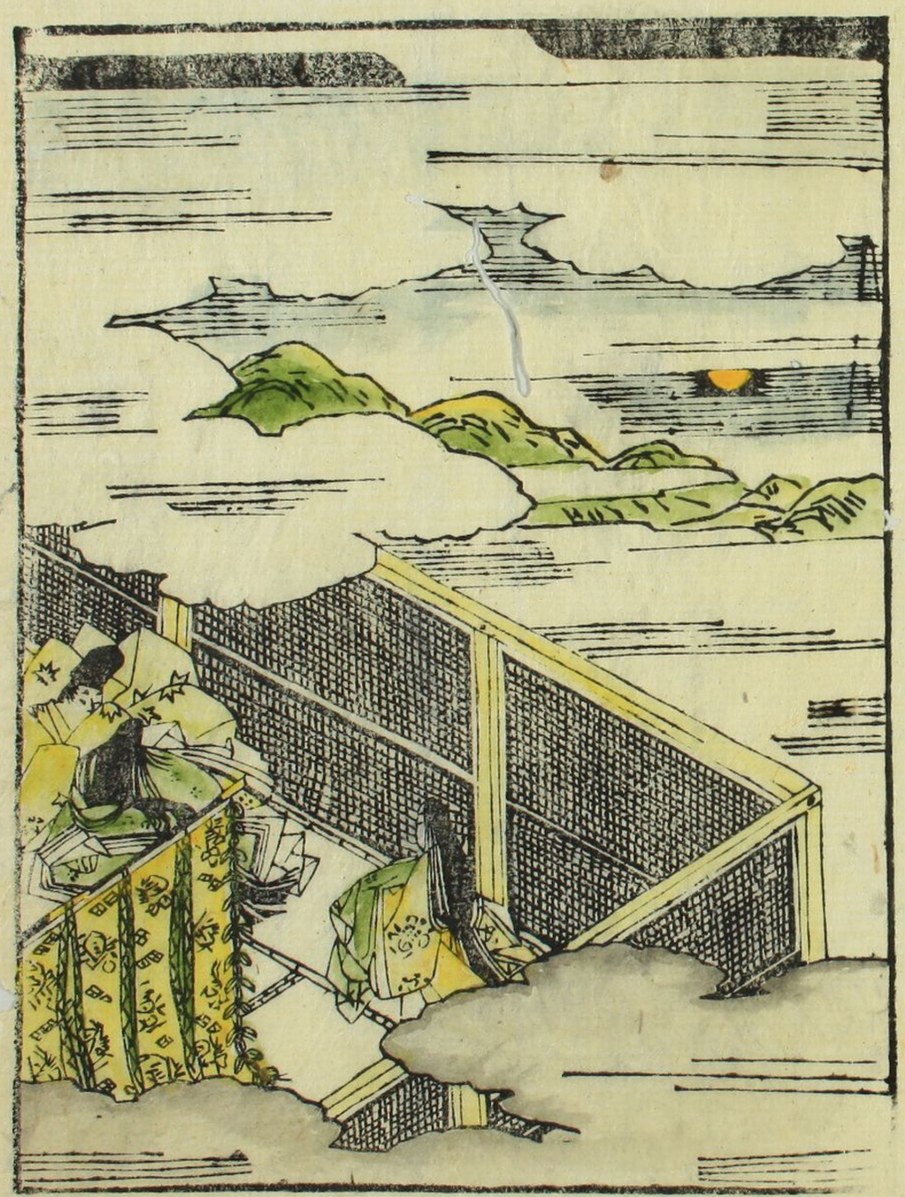
　　ゆくとてあまをぶねをぼうふつを
わまれぬるかなまつひるとありけれ中の品
　　ゆ玄ハいれまるみをんなすきゝ人のるんゝ
めるゝねのさわるゝ山ゆまれを名ばく

きさらぎのつめ京へむかられ給へいくの
ちやうろくもりてもろかのかの人
はあの君のれとにあまふなわよられいうちの
あまにこめ給かりひいきうちわしこのぬ人
もとれきこてたつきなけるをうるを
ちくこ給うをあの君ふうとくて色めり
うまへをも又こまみてこへいの自文よまり給
つりタこへ給しき給るに梅の香ぬをて
ておちますかをもこつしをしわてまろ
まへを文

こうへの心よかふ花をわや文よふて
ちくはつるとのまこの君董
みふへよかとよせるる花のえを心て
ろかへりけ色白いは文あるの心うて人の
うへるた紅もこうるるわふなてうひくし
くをあつるひをふれ心てるをもるふ
給へくうほう
ちくをや宿の衣ちーまふ花のひ
もとくかもきたりり京へあのふへきれを
ゆるひようちへるかかり中の君ふ

てまつり給もおれるに梅の香も匂らと
のにまつひもたる花をすねとむすはゆる
けまなる中の君
うる人もあるゝ小海うふ山里小むすめ
ゆる花のうそをもる
神奈川 梅小むすめのうひうて梅ら
うけるに屏風をとりの 梅こあい梅をうや梅をうるひまを梅ひ人
のうる人立ちまつて弁のあま
されよりけるこの川よりをとりけ人
をれは命を海うるう

方はうまん源の川よりうてもあるき
をこ小ちれ中の君いつさねは源の川
にあをの屏ちも梅ひをうやこ人ひう
のまつを弁尼
人ハみかりうきうる神のうるひう
ゆをたるあまれ中の君
ちるうるあれ衣ようとうれやうきうる
浪よりを我神京ちはむるいりう萱
ちもはかりをうる出仕車にのる実君
あり君ハうけきを世もあひるををどう



河よりけくちをいまひらき
ゆきうちとけさとものとそうさつ
もりのみちのはたらけくて中君
あるじはいかにかくれ月も世にをそ流
て山ふかくいれつ井よいうんとあやうく苔
うちとくらうちのはをとうとをとと
ゆいんしにおとを都へおくるとうく中
のかをもわり白文まちはりまくはかつ
うはの車のりたらせはてかつさはつ
なまりおをきてはてうるかはりくあるあの

ゆうりのかぜにまつらうみとうと
き人をとゝろかしきもゝ角ゝんゝをてうり
ゝるゝゝゝゝゝのゆうたゝゝゝみれゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ